

東洋學報 第六十四卷第三・四号 昭和五十八年三月

論説

黄淮交匯と潘季馴の河工

谷 光 隆

まえがき

潘季馴、字は時良、号は印川、正徳十六年（一五二一）の生まれで、烏程（浙江省呉興県）の人。嘉靖二十九年の進士、累進して万曆十九年に工部尚書兼左都御史となり、同二十三年（一五九五）七十五歳で没した。その半生の業績は、渾身の努力を傾けた各処の河工にある。すなわち、『明史』卷二三の本伝には「季馴凡そ四たび治河の命を奉ず。前後二十七年」とあるが、この二十七年というのは、嘉靖四十四年より万曆十九年までを数えたもので

この間の最も重要な治河の実績として、

(一) 嘉靖四十四年—隆慶元年、朱衡と共に行った夏鎮河の開鑿工事

(二) 隆慶四年—五年に行った邳州の築堤工事

(三) 万曆六年—七年に行った淮安近傍の治水工事

(四) 万曆十七年に行った獸医口・李景高口・夏鎮などの決口築塞工事

の四つを挙げている。<sup>(1)</sup>これらは何れも黄河の決潰、氾濫をその直接の契機としているが、なかんずく<sup>(2)</sup>の工事は、黄淮両河と大運河との關係を調整する意味をもった大工事で、その功業は清の斬輔と並び称せられ、近数百年間の中国にあって最もすぐれた治水家と讃えられている。

その著に『河防一覽』十四卷があり、『四庫全書総目提要』にはこれを解題して、

其大旨謂、通漕於河、則治河即以治漕。会河於淮、則治淮即以治河。合河淮而合入於海、則治河淮即以治海。

故生平規画、総以束水攻沙、為第一義。

と言っているが、実にこの「束水攻沙」こそは、彼が終生持ち続けた確固不動の信念であり、その治水工作の大眼目となるものであった。『明史』卷八四、河渠二、黄河下にはまた右の旨意を敷衍して、

大旨、在築堤障河、束水帰漕。築堰障淮、逼淮注黄、以清刷濁、沙随水去。合則流急、急則蕩滌而河深。分則流緩、緩則停滯而沙積。上流既急、則海口自關、而無待於開。其治堤之法、有縷堤以束其流、有遙堤以寬其勢、有滾水壩以洩其怒。法甚詳言甚弁。

と言っている。以下に縷述するところは更にこれを敷衍したもので、要は「東水攻沙」の四文字に集約せられる。

## 一 潘季馴の登場

万曆六年—七年、淮安近傍の治水工事における潘季馴の登場について、前記『明史』の本伝には、

万曆四年夏、再起官巡撫江西。明年冬、召為刑部右侍郎。是時、河決崔鎮、黃水北流、清河口淤澱、全淮南徙、高堰湖堤大壞、淮揚高郵宝応間、皆為巨浸。大学士張居正深以為憂。河漕尚書吳桂芳議復老黃河故道、而総河都御史傅希攀欲塞決口、東水帰漕、兩人議不合。会桂芳卒。六年夏、命季馴以右都御史兼工部左侍郎代之。と述べている。すなわち、万曆四年の八月と五年の八月に、黄河は崔鎮で決潰した。<sup>(3)</sup> 崔鎮は淮安府桃源（今の泗陽）県治の西北三十里にあり、清口（後述参照）より九十里の上流に当たつたが、<sup>(4)</sup> ここで黄河の堤防が決潰すると、黄水は北流し、清河口（＝清口）は淤澱し、淮水は南徙し、高家堰（洪沢湖の東北岸にあり）の湖堤は大壊し、南は高郵州、宝応県に至るまで淮揚の一带が広範圍に被水した。そこでその対策として河漕尚書吳桂芳は老黄河の故道を復しようとし、総河都御史傅希攀は決口を塞いで東水帰漕しようとし、兩人の議が一致しなかったが、たまたま吳桂芳が病没したので、六年二月、潘季馴がこれに代り、都察院右都御史となつて工部左侍郎を兼ね、河漕を総理することになったといふ。<sup>(5)</sup>

それでは、吳桂芳が復しようとした老黄河の故道とは一体いかなるものであろうか。老黄河は、淮河の一支流である泗水が淮河の本流と合流する地点の付近にある。もう少し説明すれば、淮安府清河県治の西北三十里に三汊河

口（三義鎮口なる地点があり、ここで泗水（＝南清河）は大清河と小清河の二つに分かれる。大清河はそれより東流して県治の東北に当たる地点で淮河の本流に合流し、小清河はそれより南流して県治の西南に当たる地点で淮河の本流に合流する。そして弘治以後、黄河の本流は徐州以南で泗水の故道を奪い大清河に入つたのであるが、嘉靖初年頃からこの大清河はしだいに淤塞するようになった。すなわち正徳年代までの黄河は、清河県内では大清河を本流としていたが、嘉靖以後になるとそれまで支流であつた小清河が本流となつたので、ここにいる老黄河は、嘉靖以後淤塞してきた大清河の故道をさす俗称である。泗水（＝南清河）と淮河本流との合流点はこれを泗口、清河口、清泗口、清口などと言つたが、大清河と小清河とを区別するとき、前者を大清河または大河口、後者を小清口といった。大清河と小清口との間の距離は凡そ五里であるが、明末においては前述のように、黄河の本流が小清河に入つたので、小清河の河口をとくに清口と呼ぶようになったのである。『中国古今地名大辞典』の「清口」の項を見ると、

在今江蘇淮陰縣西南。古泗水入淮之口，亦名清河口。旧為黄淮交匯之處。

とあり、清口をもつて「黄淮交匯」の処としている。そして其処は、大運河および黄淮兩河の治水上きわめて重要な地点である。<sup>(6)</sup>

ところで、万曆五年における治河の対策としては、老黄河の故道を復するという呉桂芳の主張が有力であつたが、なおこの外にも種々の意見が開陳されている。そこで同年の実録によつて、先ずそれらの諸説の要点を摘記してみよう。

(一) 三月壬子条 巡按直隸御史陳世宝の説

近年は黃河がしばしば崔鎮で決潰し、老黃河の故道に向かつて流れるようになったので、この際三義鎮口を開濬し、河流を大河口に向かつて誘導すべきである。そうすれば淮水は黃水に圧迫されることなく清口の故道に湧入し、淮揚の水害を解消することが出来るからである。

(二) 六月甲戌条 総督漕運侍郎吳桂芳の説

黃河が崔鎮で決潰すると、その下流一帯は淤塞して淮口（＝清口）が塞がる。すると淮河はそこを通過して草灣河に下ることができず、南流して山陽・宝応・高郵の間に横灌する。又このような時には洪沢湖の水位も異常に高まるので、其の東岸の堤防を強化してこれを護持すべきである。<sup>(?)</sup>

(三) 閏八月乙酉朔条 河道都御史傅希摯の説

崔鎮の決口を塞いで黃河の全水を束ね、これを漕河の中に流すべきである。

(四) 右同日条 吳桂芳の説

衝刷（河流の勢いによって泥土を掃去すること）によって老黃河の河道を回復すべきである。

(四) 閏八月辛丑条 礼科左給事中湯聘尹の説

山陽・宝応・高郵の一帯には、淮河の水が瀰漫しているので、この際これを南方に誘導し、瓜洲において揚子江に入れるべきである。

(六) 九月丁卯条 管理南河工部郎中施天麟の説

清口が淤塞すれば黄河の上流は必ず何処かで決潰するが、いつも堤防を修復するのが精一杯で、河底を挑濬するという余裕がないため、河床は年々高くなって決潰の場所はますます上流に及んで行く。故にこの際の方策としては、巨費を惜まず日子を限らず、徹底的に黄河を挑濬すべきで、これが一勞永逸の計である。

さて、黄河が崔鎮で決潰した場合には、通例、まず清口の付近が淤塞する。そして淮河の水は東流を阻まれて南徙し、高家堰その他諸湖の堤防は大壞して、山陽・宝応・高郵など淮揚一帯の地域が巨浸となる。そこでその対策として打ち出された右の諸説を見ると、(一)の陳世宝の説は、黄河を老黄河の河道に導くことによって清口付近の淤塞を減じ、これによって淮水を黄水に対抗せしめようとするもので、現に河流がその方向を取っている点から考えても、一応は妥当性のある意見である。(二)において呉桂芳は、高家堰の補強が必要であるという見地から固堤説を唱えているが、同時に(四)においては陳世宝と同様、老黄河の故道を復するという説を主張している。そしてこれが(三)の傅希摯の決口を塞いで黄河の全水を束ねる、という説と対立したとは『明史』の言うところである。(四)の湯聘尹の説は、淮揚の水災を救済することに主眼点を置いた意見であり、直接黄河の治水を図るという方策ではない。(六)の施天麟の濬河説は、部覆にも言うところであるが、黄河のような大河の場合には技術的に困難であり、従来から格別の成案がないものである。

まさに百家争鳴の観があるが、議論の決着はひとまず同年の十二月についている。すなわち、これまで兵部左侍郎で総督漕運の職にあった呉桂芳を工部尚書に陞せて河道と漕運とを総理せしめ、河道都御史の官はこれを裁革して、<sup>(8)</sup>傅希摯は陝西巡撫となったのである。<sup>(9)</sup>そこで、いよいよ呉桂芳の主張に基づく治河の工程が実施されるかに見

えたが、彼はその直後、万曆六年正月に没したので、凡ては白紙に還元されることとなった。ここにおいて吳桂芳に代つて登場したのが潘季馴である。

## 二 兩河経略の根本問題

前述のように、潘季馴は吳桂芳の突然の死によってその後任に挙げられ、当面する黄河治水問題の最高責任者となったのであるが、それは当時の権臣、内閣大学士張居正の推薦によるものであった。<sup>(10)</sup>『張太岳文集』には、張居正が潘季馴に与えた答書凡そ十通を収めているが、それを読んでみると、いかに居正が季馴を信頼していたか、両者の肝胆相照らす間柄を偲ぶことができる。張居正の内政上における業績として、黃淮下流の治水はその重要な一環であるが、それは直接には潘季馴の業績に外ならない。兎に角こうして黄河治水問題の最高責任者となった彼は、就任後間もなく現地視察の結果を踏まえて、<sup>(11)</sup>「兩河経略疏」なる意見書を上った。<sup>(12)</sup>それは黃淮兩河の治水に関する彼の基本的認識を、総括的、具体的且つ理論的に述べたものであり、『河防一覽』に収める数多くの上奏文の中でも、最も重要な意味を持つものと言つてよい。

そこで、これを熟読してみると、彼は、疏・濬・築・塞という治河の技法のうち、疏・濬には反対して築・塞を主張し、とくに築堤はその根本信条となつてゐることが分かる。すなわち、崔鎮の決口を塞いで徐州より清河に至る黄河の兩岸に堅固な遙堤を築き、桃源以南の三カ処に滾水壩を設けて伏秋の水による堤防の損壞を防ぐ。高家堰の堤を築いて淮水の東侵を防ぎ、淮安新城の北堤を築いて黄河の南侵を防ぎ、黃淮兩河を途中で旁決することなく

合流せしめ、その強烈な水勢を藉つて土沙を衝刷しこれを海に注ぐ。その関連工事として黄浦口等の決口を閉塞し、宝応堤を修築し、東閼等の淤浅を挑濬し、五閼・五壩を修復する。なお、老黄河を開復する意見に対しては、その工事に巨費を要した技術的にも困難であるとしてこれを却けている。

こうした彼の治河に対する基本的見解は、右の疏文とは別に「河議弁惑」（『河防一覽』卷二）および「治河節解」（『皇明經世文編』卷三七七、宸断大工録）の中に取り纏められているが、この兩篇は字句に多少の異同があるだけで、その内容は殆んど同一のものと言ってよい。又このほかに「兩河経略隄決白」（河海叢書本『河防一覽』付存）なるものがあり、これには弁惑・節解に見えない点に言及した箇所がある。そこで、ここには「河議弁惑」と隄決白により、その中樞となる観点を重ねて指摘しておこう。

いったい、彼の治水工程の中で最も重要なポイントとなるのは「高家堰」の修復であるが、それはまず淮水が黄水を避け高堰を壊つて東流し、これに次いで黄水がまた崔鎮に決して北流するに至つたと考える。すなわち、堤決して後に水が分かれたという認識に立ち、高家堰を修復することによって黄淮兩河を再び合流せしめようとするのである。そして、

水分則勢緩，勢緩則沙停，沙停則河飽。尺寸之水皆由沙面，止見其高。水合則勢猛，勢猛則沙刷，沙刷則河深。尋丈之水皆由河底，止見其卑。築堤束水，以水攻沙。水不奔溢於兩旁，則必直刷乎河底，一定之理，必然之勢，此合之所以愈于分也。（『河議弁惑』）

という。『皇明經世文編』の編者は、「兩河経略疏」の本文の一处に旁注して「潘公治水大要，在築高家堰」といい、



また一処に旁注して「并河一処、使水刷沙、此潘公本旨所在」といっているが、蓋し的を射た適評と言うべきであろう。

次に重要なのは、黄河の兩岸における「遙堤」の築造である。これについて彼は又いう。

縷堤即近河浜，束水太急，怒濤湍溜，必至傷堤。遙堤離河頗遠，或一里余或二三里，伏秋暴漲之時，難保水不至堤。然出岸之水必淺，既遠且淺，其勢必緩，緩則堤自易保也。（河議弁惑）

堤防にもその種類によって色々の名称がある。ここに見えているのは縷堤と遙堤で、縷堤は河岸に近接して築かれる堤防、遙堤はこれより通常一里ないし二、三里を距てて築かれる堤防である。すなわち遙堤は、縷堤が水防の第一線であるに対してその第二線を形成するものであり、伏秋の大水が第一線を突き破った場合にも、この第二線で受け止めようとするのである。そしてこのような遙堤の制は、河南の太行堤に倣ったものであった。<sup>(13)</sup>

次には「滾水壩」即「減水壩」の設置である。これについて隄決白には、

滾水者減水也。水至隄半，即任其滾出隄外也。所減之水，亦從灌口出海，此与留決無異。但決口与河身等，故能掣全河之水。減水壩高出於岸，故止減盈溢之水，水落則河身如故也。

とあり、「河議弁惑」には、

決口虚沙，水衝則深。故掣全河之水以奪河。壩面有石，水不能汕。故止減盈溢之水，水落則河身如故也。俱建於北岸者，欲其從灌口入海也。

とある。つまりこの滾水壩即減水壩は、遙堤に設けられた一種の分水口に外ならぬが、これが単なる決口と異なる

点は、決口なればそれは河底と同一の平面であり、且つその表面は脆弱な土砂である。ところが減水壩は河底より一定の高さ、つまり堤防の中腹に設けられ且つその表面は石をもつて疊んである。故に大水が至った際にも決口のように全河の水が流出することではなく、壩の高さを越える盈溢の水が堤外に流出する訳であり、これによって堤防は損壊を免れるのである。

さて、上述のような基本方針によって行われた黄淮両河の治水工作は、万曆六年九月に起工され、翌年十月に完工を見た。<sup>(15)</sup>その内容は彼の「河工告成疏」(『河防一覽』卷八)並びに給事中尹瑾の「科道会勘河工疏」(同卷一三)の中に窺われ、工程の細目を分析列挙しているが、今これを総括すれば、

築過土隄 長一十二万二千二百六十八丈三尺一寸

砌過石隄 長三千三百七十四丈九尺

塞過大小決口 共一百三十九処

建過減水石壩 四座 每座長三十丈

修建過新旧閘 三座 車壩 三座

築過攔河順水等壩 十道

建過函洞 二座 減水閘 四座

濬過運河淤淺 長一万一千五百六十三丈五尺

開過河渠 二道

栽過低柳 八十三万二千二百株

用過銀 四十九万七千二百七十五兩七錢一分七釐九忽

用過米 一十二万六千七百二十三石五斗六升二合

（每石原議折銀五錢。折該銀六万三千三百六十一兩七錢八分一釐。通共銀五十六万六千三百三十七兩四錢九分一釐七毫九忽）となる。次にこれらの工程の中、その主要なものについて具体的に説明を加えて行こう。

### 三 高家堰の修築

高家堰（卽高加堰）は、淮安府治の西南四十里にあり、更にその西南には洪沢湖を控え、東流する淮河の水をここに障つて清口に導き、以つて黄河の水に敵せしめる役割を果たす。一に捍淮堰ともいうのはこのためで、この堰堤は黄淮両河の経略土きわめて重要な意味を持つものである。そこで先ず『天下郡国利病書』原編第十一冊、山陽、高加堰の条を見ると、

堰以捍淮名。曰高加者、為護運道邑井、宜加高而名之也。去淮西四十里。三国時、広陵太守陳登所築。堰長三十里。中地庫而工高。北自韓信城、五里至青墩、二十里至武家墩、又南至管家莊。堰西為阜陵湖、湖西為淮。每淮溢入湖、頼此堰以障之。不則徑衝黃浦口、趨射陽湖、而運道梗矣。淮不会河、則河力不能決沙入海、久且城邑虞于瀦蕩。先年堰圯。山陽罹患。隆慶六年、知府陳文燭議申、督撫王宗沐請帑、鳩工修築。万曆十四年、総河侍郎楊一魁重修。按此堤祖陵在泗州、而淮揚兩府在下游、所関至重。及費帑帑什千万以成功、兩傍植樹、

守堰有夫，堰石以銀錠鉄棒，堰底以巨松排椿。

とあり、つぎに『淮関統志』卷四、郷鎮、高家堰の項を見ると、

城西南四十里。漢広陵太守陳登所築，故又号為陳公塘。當日湖西為淮，本不相通。築堰原資灌漑，非以捍水患也。自河与淮合，二瀆並高。於是淮浸諸湖，漚而為一。洪水直抵堰下，衝蕩激射，危險可虞。加高增厚，屹若長城。而明代堰圯，七邑罹災。隆慶六年，漕撫王宗沐・知府陳文燭，始議脩築成功。郡人丁士美為文以記之。

とあり、また『癸巳存稿』卷五、高家堰の条を見ると、

建安五年，陳登於淮東岸築堰，瑄因增之以固淮。時謂之高家長隄。以其地旧為高姓所居。嘉靖時，総河曾鈞奏，猶謂增高家長隄，而於下繕新莊閘。至万曆時，総河潘季馴両河議引府志，則謂之高加堰。志注云，高加者，為護運道并邑宜加高而名之，蓋益加而益高耳。是万曆以前土人謬說也。加高非長策，史志伝止作高家堰是也。洪沢湖於古為淮浦隄，後漸汜為洪沢鎮，為淮水所蝕，浸淫成湖。遂合万家湖，泥墩湖，富陵湖，並為一湖。而昔之淮浦富陵両隄，泗州一州，総為大沢。不得不以堰為重。

とある。高家堰は、後漢の献帝の建安五年、広陵の太守陳登がこれを築いたのに始まるが、それより一千二百五十六年を経て明の永楽十三、四年、平江伯陳瑄の修治に至るまでは殆んど史上に云々されることがなかった。それは黄淮両河がこの付近で合流することのなかった古い時代においては、堰は単に灌漑に資するのを目的とし、水患を捍ぐことを目的とはしていなかったからである。しかし黄淮両河がひとたび清口の付近において合流し、黄河の決潰によって淮水が暢流を阻まれると、漫衍した水は諸湖を合わせて巨浸となり、ここに洪沢湖東堤の加高と増厚が

必要となったのである。<sup>(16)</sup>

陳瑄の修治は、武家墩より大澗・小澗を経て阜寧湖に至る堤防二十六里余の修復であつたが、<sup>(17)</sup>その後また二百余年を経て剝蝕ようやく甚だしく、加えて塩徒による盜決などもあつて、隆慶四年にはついに大潰した。このとき淮河の水は東注して白馬・汜光などの諸湖を合わせ、さらに黄浦・八浅に決して山陽・宝応・高郵・興化・塩城など淮揚の諸州県は一時に巨浸となり、黄河の濁流はその虚を衝いて西沂し、鳳陽府の寿州・泗州方面に至るまでまた一望の巨浸となつた。<sup>(18)</sup>そこで再び高家堰の修築が火急の問題として提起されたのであるが、右利病書の本文にはそれが、

隆慶六年、知府陳文燭議申、督撫王宗沐請帑、鳩工修築。

と見えている。この記事は同年の実録には見えないが、『江南通志』卷五四、河渠志、淮一には又、

(隆慶)六年、漕撫王宗沐、築高家堰及淮安府四長隄。

と見え、続けて王宗沐の「淮郡二隄記」と丁士美の「高家堰記」を付載している。<sup>(19)</sup>今この兩記によってその工程を伺うと、北は武家墩より起り南は石家荘に至るまでの三十里余(五千四百丈)で、面闊は五丈、底闊は十五丈、高さは地形の高下によって異なるが凡そ一丈、隆慶六年九月より万曆元年正月に至る五ヵ月で完成している。しかし同三年三月には淮河が又も高家堰に決し、以後、万曆五年に至るまで同様の事態が繰り返されたので、該地方の水患は容易に平治することがなかった。<sup>(20)</sup>

このため万曆五年には、黄河の治水をめぐる種々の意見が開陳されたこと前述の通りであるが、この頃には黄

河が決潰するばかりでなく、同時に淮河も決潰しているので、潘季馴の意見はむしろ淮河の治水にこそ重点を置くべきであるとし、その具体的方法として高家堰の築堤を説くのである。『明史』卷八七、河渠五、淮河に、

〔万曆〕六年、総河都御史潘季馴言、高堰淮揚之門戸、而黃淮之關鍵也。欲導河以入海、必藉淮以刷沙。淮水南決、則濁流停滯、清口亦堙、河必決溢上流、水行平地、而邳徐鳳泗、皆為巨浸。是淮病而黃病、黃病而漕亦病、相因之勢也。

とあるのはこれで、「淮病みて黃病々、黃病みて漕亦た病む」と言うのであるから、淮河の治水は黃淮交匯の処における治水の大前提と考えられているのである。

こうして築かれた堰堤の規模は、「河工告成疏」によれば、

修築高家堰隄六十余里、計長一万八百七十八丈。俱根闊十五丈至八丈六丈不等、頂闊六丈至三丈、高一丈二三尺不等。内三千四百丈、会同徐水二道、俱用椿板、廂護堅固。

というもので、堤長六十余里は、陳瑄の二十六里余、王宗沐の三十里余に比べて二倍以上となっている。これは旧堤より更に南に向かって延長されたもので、『万曆会典』卷一九六、工部、河渠一、淮安運道の条には、

〔万曆〕七年、復築高堰。起新莊至越城、長一万八百七十余丈。

とあり、新莊より起こって越城に至るものであった。<sup>(21)</sup> また根闊・頂闊・堤高などは、王宗沐のそれとほぼ同様であると思われるが、それは黄河の遙堤などと比べると格段に大規模なものである。しかも全長の三分の一は、椿（くわ）や板などを用いて特別に補強を行っており、その用意の尋常でないことが分かる。<sup>(22)</sup> そして「宮保大司空潘公

伝」(申時行撰)<sup>(23)</sup>によれば、

高堰之工最鉅、公勞最劇。蓋風雨翹蕭中、与役夫雜处葦舍、四浹旬而堰成。

とあるから、その施工に要した期間は四十日であり、また「河議弁惑」によれば、

二月決工告竣、而清口遂闢。七月隄工告成、而清口深闊如故。八月河水大退。

とあるから、その竣工は万曆七年の七月であつた。<sup>(24)</sup>

#### 四 淮安新城北堤の修築

高家堰は、淮安の近傍で淮河の東侵を障るものであつた。これと同じような意味で黄河の南侵を障るものが淮安新城の北堤である。これについても古くは陳瑄が清江浦より柳浦灣に至る東西四十余里の堤防を築いているが、前出、王宗沐の「淮郡二隄記」によると、彼もまた万曆元年の冬に夫を募つて郡西の長堤を築いたという。それは清江浦の薬王廟より起り、東して大花巷を歴、西橋、相家灣より新城に抵り、金神廟を過ぎて柳浦灣に至るもので、長さ六十里弱(八千七百九十八丈)、堤面四丈、底広十二丈、高さ七尺余、三ヵ月を経て完工した。潘季馴の築堤工事はその後を承けたもので、これを「河工告成疏」によって伺うと、

修完原分淮安府新城北旧隄、自清江浦起至柳浦灣止、共長九千八百五十一丈。幫闊二丈一丈五尺以至一丈不等、高四尺至二三尺不等。築完新隄、自柳浦灣至高嶺止、長六千六百四十丈。俱根闊四丈五尺、頂闊一丈五尺、高六尺。

となっている。これによると、清江浦より柳浦湾に至る間の九千八百五十一丈は、ほぼ王宗沐の築いた旧堤により、その闊さと高さを加増したもので、その結果はほぼ高家堰の堤防に匹敵する規模のものとなった。つぎに柳浦湾より高嶺に至る間の六千六百四十丈は、まったく新規に築いたもので、その闊さと高さは旧堤には比肩しないものである。

因みに、『河防一覽』卷五、歴代河決考に「柳浦湾隄、東三十余里、西四十余里」といい、『明史』卷八四、河渠二、黄河下に「柳浦湾堤、東西七十余里」といっているのは、その数字から見て清江浦より柳浦湾に至る間の旧堤について言ったものであり、柳浦湾より高嶺に至る間の新堤はこれに含まれていないと考えるべきであろう。<sup>(26)</sup>

## 五 黄河兩岸の遙堤

次は黄河兩岸の遙堤である。潘季馴の「併勘河情疏」(『河防一覽』卷一二)および「河上易惑浮言疏」(同上)に拠ると、開封・歸徳より安東に至るまでの黄河は、一般に河床が付近の地面よりも高い天井川であったという。これは黄河の運ぶ泥が永年の間に堆積してでき上ったものであり、その状態は明末に至ってとくに著しくなったようである。そのため大水の際には決堤と氾濫が跡を絶たなかったこと、同じく「遵奉明旨計議河工未尽事宜」(同卷九)に、

先年淮北一帶、惟恃縷隄。東水太迫，卑薄雜沙。每年伏秋泛漲，決口不下數十。決愈多則水愈散，而沙愈停。沙愈停則河愈高，而決愈甚。海口衝刷無力，遂致淺狹。以故徐呂而下，兩岸田廬，溢為巨浸，桃清運道，僅同



一溝、運道民生、敝壞極矣。

とある通りである。そこで、この淮北方面における彼の施工は、主として遙堤を築くことにあった。いま、「歴代河決考」（同巻五）の記載によると、

婦仁集隄 四十余里

徐睢邵宿桃清兩岸遙隄 共長五万六千四百三十余丈

馬廠坡隄 七百四十余丈

がこれに相当し、また「河工告成疏」の記載によると、

婦仁集遙隄 七千七百八十三丈八尺

桃源県迤南馬廠坡遙隄 七百四十六丈

其他遙隄 五万六千四百三十三丈一尺一寸

がこれに相当し、根闕は九丈〇四丈、頂闕は三丈〇一丈、高さは一丈二尺〇七尺である。さらに『万曆会典』巻一九六、工部、河渠一、黄河の条には、

其南岸，自三山頭至李字鋪，長二万八千五百五十八丈。又自婦仁集築橫堤，至孫家灣，長七千六百八十余丈。

又於桃源県馬廠坡築堤，長七百四十丈，以遏南奔入淮之勢。其北岸，自谷山至直河，長九千四百六十四丈。又自古城至清河，長一万八千四百十丈。

とあり、遙堤を黄河の南岸と北岸に分けて、より詳細な地名を挙げているが、『河防一覽』巻一所載の「全河図説」

によつてこれを検討すると、先ず南岸の「三山頭より李字舖に至るまで」とある三山は、徐州府治の東境にあり、李字舖は邳州と宿遷県との境界（宿遷県内）にある。また北岸の「谷山より直河に至るまで」とある谷山は、やはり徐州府治の東境呂梁洪の付近にあり、直河は邳州と宿遷県との境界にある。したがつて以上の部分は、要するに徐州より邳州に至る間の黄河の南北兩岸ということになる。ところで、北岸については更にもう一つ「古城より清河に至るまで」がある。この古城は邳州と桃源県との境界（桃源県内）にあり、清河に至るまでとは、清河県治の西境に至るまでである。したがつてこの部分は、桃源県内の黄河北岸ということになる。そして、図内の説明文に「李字舖以下縷堤，去河本遠，而睢水必由小河口，白洋河以出蓮河。地勢窪下，河湖相通。故不議築遙堤。止於婦仁集，築堤横截，以杜奪河之患。」

自直河至古城，因河外諸湖，藉以容蓄泛漲之水。湖外高崗乃天然遙堤。故不議築。とあることにより、李字舖以下と直河より古城に至る間に遙堤が欠如している理由は了解される。

次に前出の三資料何れの場合にも、婦仁集遙堤と馬廠坡遙堤がとくに他と区別されているのは注意すべきであろう。これは黄河の兩岸に沿うた縦堤ではなく、宿遷県および桃源県の黄河南岸より分岐した横堤なるが故である。

このうち婦仁集遙堤は、宿遷県と桃源県との境界（宿遷県内）にあり、会典の文によれば婦仁集より孫家灣に至る間で、婦仁集については『淮関統志』卷四、郷鎮に、

在桃宿二邑之交，劉武溝地方。与淮関後湖口相近。

とあるが、孫家灣の正確な位置については詳らかでない。しかし『読史方輿紀要』卷一二九、川瀆六、漕河には、

この付近の河道について、

又西二十里、曰白洋河口。婦仁集堤在焉。

と記し、これに註して「堤在河口東南」といつているから、孫家湾は白洋河口の東南にあつたのである。白洋河口は桃源県治の西八十里、崔鎮の西四十里にあるが（白洋河は睢河の支流で、白洋河口の西二十五里に睢口＝小河口がある）、そこには以前から七千八百六十余丈の長堤があつた。潘季馴はこれを修築したのである。この堤防は平時、睢河および付近の湖水を束ねて黄河に入れると共に、伏秋の際にはそれらの水が旁溢して南侵することを捍ぐ、すなわち、これによって泗州の陵寢（太祖の祖父熙祖の陵）を保衛し、高家堰堤の決潰を防禦するので、その機能はまさに高堰と相表裏する重要な堤防である。<sup>(27)</sup>

また、馬廠坡遙堤は桃源県と清河県との境界（桃源県内）にあるが、この付近は土地が平坦なため、黄河の水が漲れば淮河に入り、淮河の水が漲れば黄河に入る。したがってここに横堤を築くのは、黄淮相互の浸淫を障るのが目的である。<sup>(28)</sup>

## 六 黄河北岸の減水石壩

「河工告成疏」によれば、減水石壩は崔鎮、徐昇鎮、季太鎮、三義鎮に設けられ、計四座、壩身はいずれも鴈翅と共に三十丈であるという。今その地理的配置の關係を『読史方輿紀要』によって示せば、崔鎮は桃源県治の西北三十里にあり、それより東二十里に徐昇鎮、また東三十里に季太鎮、また東二十里に三義鎮があり、更にそれより

東三十里に清河県治がある。すなわち減水石壩は、桃源・清河兩県の黃河北岸に、二、三十里の間隔を置いて配置されたものである。<sup>(29)</sup> また都給事中常居敬の「欽奉勅諭查理河漕疏」(『河防一覽』卷一四)によれば、

崔鎮壩石頂、去地僅二尺八寸、視遙隄低七尺。徐昇壩石頂、去地僅二尺五寸、視遙隄低七尺三寸。季太壩石頂、去地僅二尺、視遙隄低八尺。三壩臨水河岸、離水面各八九尺一丈不等。較之三壩、各高三四尺不等。是河岸甚高、石壩原低。每遇伏秋、水高於岸、即從各壩滾出。其不得出壩者、乃不得出岸者也。

とあるから、崔鎮壩は高さ二尺八寸で遙堤(九尺八寸)より七尺低く、徐昇壩は高さ二尺五寸で遙堤(九尺八寸)より七尺三寸低く、季太壩は高さ二尺で遙堤(一丈)より八尺低くなっていたことになる。三義鎮壩についてはここに記載がなく、正確な数字は分からないが、ほぼこれに準じて考えることができる。

## 七 五閘・五壩の移建と修築

次に五閘の問題である。まず『説史方輿紀要』の漕河の条を見ると、淮安府治に西接する清江浦の運道について、

漕河在淮安府城南。永樂十四年、平江伯陳瑄疏濬故沙河、置閘通舟、謂之清江浦。(註略)今自城而西十五里曰板閘。(註略)又十五里曰清江閘。(註略)又十五里曰福興閘。(註略)又十里曰通濟閘。(註略)閘口即清江浦口、為漕河入淮之處。稍折而北、乃為清口、即黃淮合會處也。

と言っている。すなわち、ここでは漕船の通過する河道が、淮安府治―板閘―清江閘―福興閘―通濟閘―閘口(清

江浦口）―清口（黄淮合会処）の順序になっており、陳瑄が永樂十三、四年に建置した五閘のうち移風閘は消失し、また新莊閘に相当する処が通済閘となっているのである。この新莊閘或いは通済閘は、言うまでもなく大運河が淮河に入るその入口に最も近接した閘であるから、それだけにまた最も重要な閘でもある。よって以下には、新莊閘より通済閘への移閘問題を中心として検討を進めて行くことにしよう。

それについて最初の手掛かりとなるのは、同じく方輿紀要の卷二二、江南四、淮安府、山陽県の通済閘の項である。これによると永樂中に陳瑄が置いた新莊閘は、天妃寺の東北の閘口にあったのであるが、そこは黄河の倒灌によつて淤浅することが多かったので、嘉靖末年に至つてこれを廢し、改めて通済閘を三里溝に置いた。その後隆慶中に万恭がまたもとの天妃口に閘を開いたが、これは間もなく閉ざされて引き続きさきの通済閘によつた。しかし、万曆六年には潘季馴がこの通済閘を甘羅城南に遷し、以つて明末に及んだのである。<sup>(31)</sup>

右の記述でまず第一に問題となるのは、嘉靖末年に至つて新莊閘を廢し、改めて通済閘を三里溝に置いたという点である。これについて別に『大清一統志』卷六五、淮安府、堤堰の惠済閘（清の惠済閘は明の通済閘である）の項を見ると、一、二の新事実を加えて大略の状況が判明する。すなわちそれは、嘉靖三十年、漕臣連鉉の手によつて行われたもので、新莊閘口が北のかた黄河に接して淤沙が衝射し、歳々に挑濬を煩わすため、その南に三里溝を整つて西のかた清淮に接せしめ、これを通済閘といつて其の位置は甘羅城の東南に当たる馬頭鎮の東南半里にあったのである。<sup>(34)</sup>そこで更めて同年の実録を検索すると、成程、三月己亥の条に、連鉉は都察院右副都御史総理河道の職に就いているが、その年彼が三里溝を開いたという記事は見当たらない。しかしこれに関連することとして、七月己

亥の条には、総督漕運都御史の応横が三里溝を開くべきであるという意見を上陳し、工部が覆議してこれに従ったことを記している。故に三里溝の開鑿はひとまず嘉靖三十年のことであるとしても、通済閘の建置はそれより若干遅れたものと考えられる。『天下郡国利病書』原編第十冊に引く所の「淮南水利考」には、

（嘉靖）三十一年，漕撫都御史応横，於三里溝，建通済閘。

と記し、これを嘉靖三十一年に繋けているが、果たしてそうであったかどうか猶お疑問である。その理由は実録の同三十二年正月戊寅朔の条に、河道都御史曾鈞の奏言として、

……又三里溝新河口，比旧口水高六尺。若開旧口，雖有沙淤之患，而為害稍輕。共開新口，未免淹没之虞，而漕舟頗便。宜將新口暫閉，建置閘座，及將高家堰増築長堤，原建新莊等閘，加石修砌，以遏橫流。……工部覆議，從之。……

とあることと、同じく閏三月辛酉の条に、刑部左侍郎兼都御史吳鵬・河道都御史曾鈞等の奏言として、

……三里溝新開河口，迎納泗水清流，可以避黄河之衝墊。宜創建閘座，以時啓閉。但工費不貲，乞于常鎮二府錢糧數内，量給接濟。……疏入，詔如議。……

とあることによる。すなわち、右の二資料から判断すると、新開の三里溝の河口に閘座を建置したのは、恐らく嘉靖三十二年のことと思われるのである。

次いで問題となるのは、隆慶中に万恭がまたもとの天妃口に閘を開いたが、これは間もなく閉ざされて引き続きさきの通済閘によったという点である。これについて『大清一統志』卷六五、淮安府、堤堰の新莊閘の項には、

万歴元年、総河万恭復建閘於此、旋又淤塞。

と極めて簡単に叙述しているが、但しこれに付載した万恭の「治水筌蹄」には、このとき天妃口に閘を開いた理由をかなり詳細に説明している。すなわち、嘉靖中、黄河の水が清江浦に泛入して浦内が淤塞したので、銀十萬兩を費して別に新河（三里溝）を開いたが、それは河口が清流に接して濁流に接しなければ、淤塞はしないであろうという考えからであつた。しかし黄河は伏秋の増水期には、西來の淮流を擁して新開の河口に併灌する。つまり、天妃口ならば一黄河による淤塞のみであるが、淮黄が新開口に会すればこれは二淤である、<sup>(36)</sup> と言うにある。しかし、天妃口の閘は幾ばくもなくして閉ざされ、また、三里溝の通済閘が用いられた訳であるが、この閘にはもともと動かし難い一つの欠点があつた。それは前掲の曾鈞の奏言のなかに「三里溝の新河口は、旧口に比するに水高きこと六尺」とある点である。これは同じく実録、万曆三年七月己未の条に見える御史劉光国の奏言では「天妃閘の地勢は通済より高く、淮水の灌溢は黄水より多し」と表現されている。つまりその付近の地形からいって、通済閘の位置は天妃閘（明初の新莊閘は万曆初年の天妃閘である）<sup>(37)</sup> の位置よりも低く、淮水の通済閘への倒灌は、黄水の天妃閘への倒灌よりも多かつた。しかも、伏秋には淮水のみならず黄水も同時に灌入するのである。そのうえ更にこの通済閘は、劉光国の奏言のあつた万曆三年の頃には、破損したまま補修されることもなく放置されていたのであつた。<sup>(38)</sup>

潘季馴が通済閘を移建したのは、このような現地の状況によるもので、前出、『大清一統志』の新莊閘の後文には、

(万曆)六年、河臣潘季馴、拆新莊閘、改建通濟閘於甘羅城南、此閘遂廢。  
とあり、次項の天妃閘には、

明万曆六年、河臣潘季馴、移建通濟閘於甘羅城南泰山墩北、俗訛为天妃閘。

とある。すなわち彼は万曆六年、新莊閘を取り毀すと共に通濟閘を甘羅城(淮陰故城の北一里)の南、泰山墩の北に移建したのであるが、その着工前の「恭報統議工程疏」(『河防一覽』卷八)を見ると、

今勘得、通濟閘逼近淮河、直受衝齧、勢甚汹涌。且閘設年久、底樁朽爛、加石太重、不免坍塌。相応改建於甘羅城東堅實之地。仍改濬河口、斜向西南、使水勢紆迴、不至直射、庶便啓閉。

といい、また竣工後の「查議通濟閘疏」(同卷二)を見ると、

後因天妃閘全納濁流、故復改於三里溝、尋復改於甘羅城、即今之通濟閘是也。此処為南河口。乃淮水独經之地、離黃向淮、用清避濁、漕渠無淤墊之患、舟航有利涉之休、人甚便之。

といっている。つまりこの場合、河口は西南に向かって開き、黃水の直射を避けたことは勿論、淮水の直射をも避けたのである。なお、ここで一言付け加えて置かなければならぬのは、築壩断流のことである。かつて陳瑄が設けた五閘のうち、新莊閘は最も淮河に接近した閘であつたから、伏秋の節黃水が浦内に倒灌することを防ぐため、閘外に土壩を築いた。<sup>(40)</sup> 明末の通濟閘は新莊閘に代るものであり、したがって最も淮河に接近しているので、ここにもやはり土壩を築いた。それが六月初旬より九月初旬までの期間であつたことも新莊閘の場合と同様である。<sup>(41)</sup>

五閘に関する潘季馴の施工のなかで、通濟閘の移建はその最も重要なものであるが、この外にも一つ福興閘を



移建したことがある。前出の「恭報統議工程疏」に、

福興閘、上距通濟閘計二十里、下距清江閘止五里。遠近懸絶、且亦因年久圯壞、難以加石。今議改建於寿州廠適中処所。其清江一閘、仍照原議修復。至於板閘、地窪水平、無庸啓閉、止須照旧免行增高。

とあるのがこれである。さて、右の文で通濟閘と言っているのは、三里溝の通濟閘を指すものであるが、とにかく福興閘の位置は、西北の通濟閘に至るまでが二十里であるに對し、東南の清江閘に至るまでは僅か五里であつた。そのためこれを何程か通濟閘の側に近寄せようとした訳であるが、それは本文の言葉をかりれば「寿州廠の適中処所」である。そこで、今度は寿州廠の位置が問題になる。いったい、明代の清江浦には清江廠と総称される漕船の造船所があつた。それは京衛廠・中都廠・直隸廠・衛河廠の四総を包括して呼んだ名称であるが、さらに言えば京衛廠は三十四廠、中都廠は十二廠、直隸廠は十八廠、衛河廠も十八廠より構成されてゐた。そして問題の寿州廠は、この中の直隸廠に属する一船廠なのである。<sup>(42)</sup>ところで、この直隸廠のあつた位置は、運河の南岸、東は福興閘より西は韓信城に至る七里の間であつた。すなわち、この間に十八の船廠が櫛比してゐた訳であるが、そのうち寿州廠の位置は東より数えて十六番目に當たり、西より数えたと三番目に當たる。<sup>(43)</sup>そして、ここにいう福興閘は、潘季馴が移建する以前の福興閘であるから、寿州廠の位置は旧福興閘の西六、七里の処にあつた訳で、そこに新福興閘を建てたのである。したがつてその位置は、旧通濟閘と清江閘とのほぼ中間ということになる。また残る二閘のうち、清江閘については原位置で修復したが、板閘については格別の工作を施してゐない。<sup>(44)</sup>

以上で五閘の問題については一通りの説明を終えたが、なおこれと関連して五壩の問題がある。陳瑄が清江浦を

開鑿して五閘を建置する以前から、淮安の新城には仁・義・礼・智・信の五壩があり、このうち仁字壩・義字壩は新城の東門外の東北に、礼字壩・智字壩・信字壩は西門外の西北にあった。<sup>(45)</sup>しかし、信字壩は久しく廃棄せられたままであったし、仁・義の二壩もほぼ同様の状況にあったので、潘季馴はこの二壩については修復を行わず、ただ礼・智の二壩を加築し、また新莊閘を廃棄した代りに天妃壩を創建して車盤三壩としたのである。<sup>(46)</sup>

## 八 黄浦・八浅の攔河壩と宝応湖堤

最後に大運河（裏河）沿線の堤工がある。すなわち、黄浦（黄浦口）・八浅は、万暦五年淮水の侵入によって決口のできた処で、黄浦口は宝応県治の北二十里、山陽県との境界にあり、その付近の浅瀬を黄浦浅、一に九浅という。また八浅はその南にあり、白馬浅というのが本来の名称で、宝応県治の北十里にある。<sup>(47)</sup>両処共に白馬湖の東岸に当たっているが、潘季馴はその決口を塞ぎ、併せて前面に攔河壩（水流を遮るために設ける壩）を築いたのである。同時に宝応湖の湖堤をも修築し、土堤・石堤のほか、椿笆（椿は、くい。笆は、いばらだけ）を密下して土を実たした処が一千一百一十七丈一尺、そのうえ更に減水閘四座を改建している。<sup>(48)</sup>

## あとがき

以上、万暦六、七年における潘季馴の河工について一通りの説明を終わった。そしてこの大工事により、彼が近数百年間の中国にあって最もすぐれた治水家と讃えられていることも「まえがき」において既に述べた。しかし、

彼の治河工作については、これを賞揚する者のある反面、批判的な見方をする者もまた少なくないのである。ここでは特に後者の点について述べよう。

まず、顧炎武の『日知錄』巻一二を見ると、そこに「河渠」なる一項を設けている。これは歴代の黄河治水について述べたもので、直接潘季馴の河工に言及することはないが、彼自身は築堤には批判的な態度を取っている。つぎに、錢大昕の『十駕齋養新錄』巻一八を見ると、そこには「河防」なる一項を設けており、潘季馴の治河法については、黄河は合すべしとは季馴一人が言っていることで、古よりかく言っているのではない。禹の治河は下流を九道に分けたもので、決して黄河を分けてはならぬ理由はない。黄河の支流を塞いで一道にし、河水の力を藉りて海口の沙を刷するという計画は抑々間違ひである、とこれまた頗る批判的である。

さらに、近人岑仲勉氏の『黄河変遷史』を見ると、明代の河患について述べたなかに「批評潘季馴の東水攻沙」(五四—五三九頁)なる一項を設けている。そこでは——同時代の張貞観が東水攻沙に賛成してより、その後また清の胡渭・靳輔等の称頌を経て季馴の治河の盛誉は確立した。近年では『中国水利史』の著者鄭肇経のごときも季馴に対する推崇は備さに至ると言うべきである。ただ其の賛揚することが多ければ多いほど、我々としては季馴の方略に対していよいよ厳密な批評をしなければならない。——そういう観点から岑氏は、季馴の治河法に批判的な見解をもつ後人の言説を数多く挙げ、それを拠り所としつつ自説を展開しているのである。今その趣意を汲んで重だつた論点を整理してみると、大要つぎのようなことになる。

潘季馴が固堤を強調し、東水攻沙の説を唱えたことは、一般理論としては意義があり評価できるが、問題の重点

は全淮が全黃に敵し得るかどうかで、もしそれが出来ないならば、清口の内には必ず河水が倒灌し、流れは塞り泥は停り、淤塞を來たす。現にそこには門限沙（清口付近に滞積する沙）を形成しているわけだから、當時の可能な方法でいえば、清口は挑濬するより外にはない。つまり季馴の迫淮注黃は、群羊を駆つて猛虎に敵せしめると同じで、群羊の力が猛虎に抵抗出来るかどうかは、事前に精密な計算があるべきである。張含英の『治河論叢』にも、ただ堤防があるというだけでは黃河を治するには足らないとし、束水攻沙の問題を解こうとすれば、流量、速率、冲積、糙率、地形、切面等についての今一段の研究が必要だと言っているが、これが妥當な見解である。

沙は、これを刷すれば下流に沈澱するが、下流が沈澱によって高くなり、上流が刷削によって低くなれば、全河の斜度は少なくなつて、平均の速率が減じ、これにより全河の沈澱分量は増して河底は益々高くなる。砂は此に滌すれば彼に停るので、問題はその緩急多少と最後の沈澱の地点にある。また、刷沙には限度がある。河身の淤土には新久の相違があり、新淤の衝刷は易いが、久淤の衝刷は難い。それで淤土を治するのに専ら束刷に頼ることはできない。上流がいかに急であっても、海潮逆上の抵抗力に遇えば、沙泥は必ず停下する。これを水で刷することはできず、海口は自ら闢くというのは唯心的幻想である。さらに遙堤にも問題がある。水が縷堤を過ぐれば必ず一緩するから、遙・縷二堤の間は容易に淤高する。これ遙堤と束水攻沙とは原と内在的矛盾を包含するものである。

要するに、潘季馴の逼淮敵黃は、理論と実践とが密切に連合せず、その認識はまだ真実のものにはなっていない。また、彼の河工が黃淮の下流に重点をおき、上流が疎かになっているのは短処であつて、河工完成後十年に及ばずして、すでに処々に衝決を見ている。万曆二十年前後の河工の崩壊について、彼は完全に責任を免れることは

でない。

以上、岑仲勉氏のいう所は、顧・錢二氏とは異なり、河川工学の基礎的理論をも踏まえた批判といえよう。

## 註

- (1) なお、岑仲勉『黄河変遷史』(五二六頁、人民出版社、一九五七年刊) 参照。
- (2) 于慎行、河防一覽叙。同治『山陽県志』卷三、水利。岡崎文夫『黄河治河の歴史』(『大黄河』大阪毎日新聞社、一九三八年刊所収)。
- (3) 実録、万曆四年十一月丁酉・丁未。『明通鑑』卷六六、同年八月。実録、万曆五年八月癸亥。
- (4) 『読史方輿紀要』卷二二、桃源県、黄河。『河防一覽』付存、両河経略隄決白。
- (5) 『明史』卷二二三、吳桂芳伝。実録、万曆六年二月丁酉。
- (6) 以上、老黄河については、拙稿「大運河・黄河・淮河三水系の概観―黄淮交匯河工史序論―」(『寧楽史苑』二七、一九八二年) 参照。
- (7) 草湾河については拙稿「嘉靖・万曆の交における徐淮の河工」(『小野勝年博士東方学論集』龍谷大学東洋史学研究會、一九八二年刊) 参照。なお、この時の吳桂芳の意見は『天下郡国利病書』原編第十冊に、「尚書吳桂芳復政府書」

黄淮交匯と潘季馴の河工 谷

として見えている。

- (8) 実録、万曆五年十二月己丑。
- (9) 『明史』卷二二三、吳桂芳伝。
- (10) 『明通鑑』卷六七、万曆六年是夏条。
- (11) 『河防一覽』卷一〇、申明修守事宜疏、参照。
- (12) 実録、万曆六年六月乙巳。なお、『両河経略疏』の全文は『河防一覽』卷七所収。
- (13) 『河防一覽』卷八、河工告成疏。
- (14) 同右。
- (15) 実録、万曆七年十月丁酉。
- (16) 『大清一統志』卷六四、淮安府、洪沢湖。拙稿「明代漕運の一齣―清江浦の開鑿と船廠関権の設置―」(『中山教授明清史論叢』燎原書店、一九七七年刊) 参照。
- (17) 同右拙稿。
- (18) 『河防一覽』卷二、河議弁惑。因みに、高家堰の決潰した年代については、隆慶三年とする説と隆慶四年とする説があるが、『宝心図経』卷三、河渠には「蓋し高堰は三年に決し、四年にはなお未だ完葺せざる故に云う」と言っ

ている。また、高家堰の重要性については、『天下郡国利病書』原編第十冊、高加堰図説、『江南通志』巻一、輿地志、淮安府図説にも記載がある。

(19) 『淮郡二隄記』によると、この工事が行われた直接の契機は、隆慶五年、淮河が大いに溢れたことによるという。因みに、万曆『淮安府志』巻三、建置志には丁士美の記を、同巻五、河防志には王宗沐の記を載せている。

(20) 『読史方輿紀要』巻一二九、川濱六、漕河。『明史』巻八七、河渠五、淮河。実録、万曆四年二月癸未。『江南通志』巻五四、河渠志、淮一。実録、万曆五年閏八月戊子・辛丑。『河防一覽』付存、信史紀事本末。

(21) 民国六年七月、江蘇陸軍測量局製版の二十万分一之尺「泗陽」及び「盱眙」の地図を見ると、北武墩より南方やや西に偏して、高良澗・周橋方面に延びる長い堤防があるが、別にもう一つ北武墩より南方やや東に偏して、新庄に至る短い堤防がある。これによると、新庄と武家墩とは程遠からぬ距離にあると思われる。また、『河防一覽』巻一三、給事中尹瑾の「条陳善後事宜疏」には「今熟察（高家堰）地形、南北各二十里稍亢、而中二十里為窪」とあり、同巻二、河議弁惑には「夫高堰地形甚卑、至越城稍亢、越城迤南則又亢」とある。

(22) なお、『万曆会典』巻一九六、河渠一、淮安運道の条

によると、万曆八年には高家堰の土堤が石を用いて包砌されたが、これは一部分のことで、潘季馴は後年さらに残りの部分を石で補強するように建議している（実録、万曆十九年十一月癸亥朔、参照）。

(23) 『河防一覽』付存。

(24) なお、高家堰の修築後、彼は清河県南の対岸に王家口堤と張福口堤を築いた。これも全淮の水が畢く清口に趣くための工作である（『河防一覽』巻三、河防險要。同巻一〇、申明修守事宜疏。『明史』巻八七、河渠五、淮河、参照）。

(25) 註(16)、拙稿参照。

(26) なお、『河防一覽』巻三、河防險要によると、これは遙隄であり、また、後に高嶺より戴百戸營に至るまでが接築されたのである。

(27) 『河防一覽』巻三、河防險要。『天下郡国利病書』原編第九冊、泗州志、河防。同第十一冊、歸仁集石隄及び僉事朱用光歸仁堤記。『読史方輿紀要』巻二二、宿遷県、白洋河、及び睢寧県、睢水。同巻一二九、川濱六、漕河、参照。

(28) 『河防一覽』巻三、河防險要。『読史方輿紀要』巻二、淮安府、馬廠坡。『大清一統志』巻六五、淮安府二、馬廠堤。

(29) 『読史方輿紀要』巻二二、桃源県、黄河。

(30) 註(16)、拙稿参照。

(31) 光緒『淮安府志』巻五、河防、運河。実録、嘉靖十五

年閏十二月壬子朔、隆慶六年七月甲午、万曆三年七月己未、参照。

(32) 『万曆『淮安府志』卷三、建置志、山川の清河県の条を見ると、三里溝に註して「治東南三里許入淮、今新改淮口」とあるから、三里溝なる地名は清河県治の東南三里にある溝という意味であろう。

(33) 『説史方輿紀要』卷二二、山陽県、韓信城によると、甘羅城は淮陰故城の北一里にあり、この甘羅城の東に天妃祠がある。そして祠の東北が天妃口で、陳瑄はここに新莊開を置いたのである。

(34) なお、『天下郡国利病書』原編第十一冊、清河志及び淮安府志河防、参照。因みに、『淮関統志』卷四、鄉鎮、惠濟閘には、嘉靖年間に建てた通濟閘の位置を馬頭鎮の東南七里としている。

(35) 実録には、同年四月乙亥の条にその記載がある。

(36) なお、『説史方輿紀要』卷二二九、川潰六、漕河、参照。

(37) 『大清一統志』卷六五、淮安府、新莊閘、参照。

(38) なお、『明史』卷八五、河渠三、運河上、参照。

(39) なお、『万曆会典』卷一九六、河渠一、淮安運道の条には、通濟閘は甘羅城北に改建したとあるが、咸豊『清河県志』卷一所載の「明万曆六年河口図」によると、甘羅城の東、僅かに南に偏した位置にある。尤もこのような地図

では厳密な意味で東南、東北の区別はつけ難いが、但し、その説明文にはやはり「移通濟閘於甘羅城南」とある。

(40) 註(16)、拙稿参照。

(41) 『河防一覽』卷三、河防險要。同卷八、查復旧規疏、工部覆前疏。同卷九、工部覆申巖鎮口閘禁疏。同卷一二、申飭鮮船疏。『万曆会典』卷一九七、河渠二、通濟閘、参照。

(42) 註(16)、拙稿参照。

(43) 『漕船志』卷一、廠地。

(44) 因みに、『天下郡国利病書』原編第十一冊、月河の条によると、潘季馴の移建修復以後にも、黄水の侵入により四閘の機能は癱痺したので、万曆十六年には各閘座の傍に月河(二越河)を開き、漕輓に便したのである。

(45) 註(16)、拙稿参照。

(46) 『河防一覽』卷八、恭報統議工程疏。『説史方輿紀要』卷二二九、川潰六、漕河。因みに、「車盤三礮」の車盤の意味は、輶輶(二車)を用いて船隻を運ぶ(二盤)の意である。

(47) 『説史方輿紀要』卷二二九、川潰六、漕河。『河防一覽』卷三、河防險要。なお、浅とは運河の浅瀬のことである。宝応県下の運河には九つの浅瀬(一浅く九浅)があり、『宝応図経』卷三、河渠にはその名を列挙している。

(48) 『万曆会典』卷一九六、河渠一、揚州高宝運道。『明史』卷八五、河渠三、運河上。

